

---

# ANPANMAN ~ 驚異の真実 ~

ぬじゃわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ANPANMAN〜驚異の真実〜

### 【Nコード】

N6457M

### 【作者名】

ぬじゃわきし

### 【あらすじ】

貴方は知らない・・・テレビでは楽しそうにしているアンパンマンの驚異の真実の物語を・・・

## プロローグ

未来世紀2。そのころの人類のテクノロジーはかつてないほどに発達した。だが、それはさまざまな弊害をもたらし、環境汚染や運動不足等による人類の弱体化、便利な機械の登場で経済状態が崩壊し、混乱を迎えていた。

そんな時、とあるパン屋の主人イイスナ・ヒテカス飯綱秀和は無料配布を思いついた。というのも価格の崩壊で売れのこりが大量にあり、その処理に困っていたからだ。いつしか彼は町の人々に尊敬され、「ジャムおじさん」とのあだ名がつけられた。強面の中からにじみ出る暖かい笑顔はだれが見ても心が癒された。

だが、そんな彼にも隠れた一面があった。彼はバイオ・テクノロジーの権威で、夜な夜な人造人間を製造していた。そして今までシヨクパンマンやカレーパンマン、ロールパンナちゃんやメロンパンナちゃんやテンドンマン等が製造されたが、どうも彼にとってはしつくり来なかった。中には失敗作もあったからだ。彼は人造人間らをパン屋の従業員や町の警備に使った。人間たちはすっかり弱っていてパトロールには役に立たなかったからだ。

だがある日、飯綱はとてつもない物質を発明する。「ANCO」と名づけられたその黒い物質は、とてつもない自発的なエネルギーに満ちていた。この物質はもしかしたら最高の人造人間が作れる。そう飯綱は確信した。人類はいまやすっかり衰退している。ならばこれで新人類を創生するのだ！これぞ人類の希望だ！

そして、作りはじめた。今までで最高傑作になると確信した飯綱は、神がアダムにしたように、自らをかたどった姿にした。そうする事

で自分が神だと彼は優越感に浸っていた。おお、なんという。これは。

そしてとうとう出来上がった。その名は・・・

アンパンマン - ANPANMAN -

## 人間関係

アンパンマンは周囲に好かれていたかというと、そうでもない。彼は皆から疎まれていた。禿で、強面で、一見怖そうで、その上、声が非常に高かった。

彼は少なからずしょくぱんまんに嫉妬していたと言えよう。しょくぱんまんはハンサムでイケメンで演劇の能力等にも長けていて、才色兼備そのもののタレントであった。ほかの人造人間は顔が汚れると弱化する欠陥があったが、彼だけは汚れを拭けて、つまり対処できた。その意味ではアンパンマンの次に完全たる人造人間だったに違いない。

アンパンマンと違って町中の人気者であった。たとえ、会話で一人称を「ワタシ」と言うようなキザでも彼を慕う人は山ほどいて、写真集などもある日出版していたし、歌手デビューも果たしていた。

そんなスタアに輝くしょくぱんまんだが、彼自身、内心は不安であった。なんとなれば、創造主、ジャムおじさんこと飯綱秀和の寵愛を受けているのは自分ではなくアンパンマンであったからだ。やがて用なしにされるのではないかと彼は不安におびえた。それからというもの、アンパンマンとしょくぱんまんの確執が始まり、それはやがて冷ややかなイジメにまで発展した。主にアンパンマンがいじめられたのだが、アンパンマンは何を考えたか抗議せずひたすらそれに耐え抜いた。

アンパンマンのもう一つのコンプレックスは飛ぶ速さであった。圧倒的にメロンパンナに負けていたのだ。その上彼女はアンパンマンよりも顔の耐久力が強かった。とはいえ、彼女は優しかった。アン

パンマンのよき友達として語り合ったりもした。アンパンマンは彼女を信頼していた。飛ぶ速さが速いので、伝言などに頼んだ事もあるが、その時はいつも、なんとなく歯痒い思いをしていた。

そんなコンプレックスの多いアンパンマンだが、彼も哀れみに思う相手はいた。カレーパンマンである。カレーパンマンは、ジャムおじさん飯綱の不良品で胃酸が非常に強力すぎたため、一日に4度、発作的にゲをした。そのうち次第に彼は衰弱して、顔は土気色で垂れ下がった。見るからに人間として危険な気がしたのだが、飯綱はなぜか彼をほっといていた。もう不良品だからとあきらめていたのかもしれない。

アンパンマンの数少ない友達は、メロンパンナのほかに二人いた。町の住人で、菅野藍ちゃんと、武田祐樹くんだ。これはあるきっかけがあった。

アンパンマンとメロンパンナがいつものように歩いていたときである。菅野藍ちゃんと武田祐樹くんが泣いていた。なにがあったのかと聞いてみると、いじめっこにいじめられたのだと。かわいそうにとメロンパンナが慰めようとしたとき、アンパンマンは制止した。

「ぼくがげんきにしてあげる。」

そういつてアンパンマンは突然頭をぎゅっとつかんだ。ぐぐぐと力を入れ、アンパンマンは歯を食いしばった。やがてピキッという音がアンパンマンの頭蓋から響き、メリメリつと裂ける音、ビリヤつと頭の一部が頭から引き裂かれ、「ぬあああああああああああ  
あ！！！！！！」とアンパンマンは吼えた。

「ほら、食べて。」

そういつて頭の一部を二人に上げた。中には「餡」がこぼれ落ちていた。アンパンマンの頭からもぼとぼと黒い「餡」が出ていた。藍ちゃんと祐樹くんは顔を見合わせて頭を食べた。それは大変おいしかった。

以来、二人とも仲良くなった。町の人々の中で唯一の理解者ともいえよう。

だが、ある日。町に危機が訪れた。

## ばいきんまんの襲撃

悲鳴が町中に響いた。それは決して嬉しい悲鳴などではなく、不吉な、確かな本能的な助けの求め他ならない恐怖の悲鳴であった。

空に紫色の円盤が浮かんでいた。円盤から細菌兵器が飛来する。といても、大抵の読者のみなさんが想像するような、ちいさなちいさな目に見えないアレではない。なぜか3m4mもある、巨大な塊なのだ。それが円盤から墜落して地面に衝突して潰れた。

ひうつつ、べしゃ。ひうつつ、べしゃ。ひうつつ、べしゃ。

そしてそのまま膨らんで、うごごごごと呻きながら人々を襲ってきた。

円盤の正体は明らかであった。あの特徴的な形。明らかにそれは“ばいきんまん”とよばれる極悪犯罪者であった。機械工学と生物学に長け、全身に紫色の化粧と、特殊な入れ歯を使ったそのおぞましい姿は、UFOにも描かれていたそのままの姿で、人々を恐怖に陥れていた。

「由々しき事態だ。」

ジャムおじさんはパン工場内の会議室で顔をうつむかせて言った。その顔の左半分は影で真っ暗だ。

「あれは、世界でも有名な巨悪な悪党だ。只ならぬ装備をしており、われわれ普通の人間では太刀打ちできぬ力を持っている。そこでだ。」

ジャムおじさんはバタコと目を合わせ、次に人造人間たちを見回して言った。

「君たちの出番だ。今回最重要任務として、ばいきんまんの母船を破壊する任務を与えられるのは・・・」

ジャムおじさんは指差した。



「アンパンマンだ。」

ざわざわとざわめく。しょくぱんまんがあからさまな嫌悪感を顔に出したのでジャムおじさんは補足説明する。

「もちろん任務は母船破壊だけではない。通称“かびるんるん”と呼ばれる細菌を、それをバラマク子機ごと破壊するのも君たちの使命だ。詳しくはわが忠実なる部下バタコが説明する。アンパンマン、来てくれたまえ。」

ジャムおじさんはアンパンマンに言った。

「これは最初の戦闘任務だ。くれぐれも気を抜くな。」

「了解しましたジャムおじさん。」

「よしきた。」

ハッチが開いた。ジャムおじさんはハッチの外を指差して叫んだ。

「それ行け！アンパンマン！」

突然母船の行く手をさえぎるものが現れるを見て、ばいきんまんはどくとくのしわがれ声で唸った。そして母船からガトリングガンをせりだして撃った。

ずどどどどどどどどど。

アンパンマンはたくみにそれを避けて、先制攻撃をする。通称「アンキック」でガトリングガンを破壊した。

「なにい！ではこれを食らえ！」

すると円盤からなにやら液体が飛び出した。それはアンパンマンの顔にかかった。煙が出てきた。

「なに・・・これは・・・硫酸・・・」

たちまち顔が凹んで溶け出した。中身の「ANCO」も飛び出し、あまりの苦痛に「ぐわああああ」とアンパンマンは呻いた。

この状況に恐慌を感じたジャムおじさんは、「アンパンマン！首を外せ！」と無線で伝えた。ジャムおじさんの意図は伝わり、アンパンマンは自動的に首をぼろっと外した。首はそのまま落下し、どこかの森の中にがさりと音を立てて失くした。

首のないアンパンマンはそのまま浮かんでいた。あまりの不気味な姿にばいきんまんも沈黙していた。

その時、突然何かがアンパンマンの首の断面に命中した。それはぐるぐると回転し、おさまった。それは新たな首であった。なぬ、新しい首だと・・・とばいきんまんはどこから発射されたか見た。ジャムおじさんが投げたのだ。ばいきんまんはそれを見て目を疑った。

「お前は・・・」

その隙を突いてアンパンマンは高速で飛び「アンパーンチ！」と体当たりした。円盤は大破し、空へ空へと飛び上がった。心なしか「バイバイキーン」との声が聞こえた気がした。

「よくやった。アンパンマンには感謝しようと思う。ではみな、報告を頼む。」

ジャムおじさんが言うと、メロンパンナが立ち上がり言った。

「A区、3人けが人が出た他は全員無事。」

カレーパンマンが立ち上がって言った。

「B区、5人重態に陥ったが他は無事、ん？・・・うつつ、おおおううつえれるれる。」

しよくばんまんが毅然と立ち上がって言った。

「C区、街の人は全員無事。ですが・・・」

「ですが？」

「テンドンマンが殺されていました。」

テンドンマンとはジャムおじさんの不良品の1つで、頭の上半分がなかった。そのため、脳が丸出しであった。

「殺された？」

「はい、どうやらばいきんまんが我々へのアピールのために頭蓋の中身を食べて殺しましたようです。カニバリズムってやつですな。はははは。」

「笑い事ではない。」

「失礼しました。それと・・・」

「何だ？」

「メロンパンナさん。」

メロンパンナは驚いてしよくばんまんを見た。

「あなたの姉、ロールパンナが誘拐されました。」

しばしの沈黙。その沈黙を破ったのはいそいそと会議室のドアを開けたバタコさんであった。

「報告です。墜落したばいきんまんの船を調べたところ、死体はありませんでした。どうやら脱出したようです。」  
「そうか。まだ生きているのだな。」

## ばいきんまんの物語

ビービービービー…

鳴り響くサイレンと共に赤色に点滅する操縦席に揺られながら、ばいきんまんは脱出装置を作動した。その間も彼は、自分の目撃した光景について考えていた。アンパンマンと言う謎の物体。そしてジャムおじさん飯綱秀和。たちまちばいきんまんからかつてない怒りがこみあげ、悔しさと共に「チクショー」と叫びながら墜落する船から脱出した。そして待機していたドキンちゃんに救助されたが、その時もばいきんまんは過去の思い出に浸っていた。

ばいきんまんの本名は真辺リチャードであった。ハーフで、紫の化粧と不気味な入れ歯を取るとキアヌ・リーブス並にハンサムであった。

工学系の大学に入り、真辺は最優秀の成績を取った。もはや将来有望と周囲から賞賛の嵐で、彼自身も優越感に浸っていた。

だが、ある日から変わった。突然飯綱秀和と言う名も知らぬむくれ男が最優秀の成績を取り始めた。なんと真辺の論文を盗み見して、さらに提出する真邊のを改ざんしたのだ。以来真辺は評判が落ち、ある日からぷつぷりと姿を消した。

彼は世に復讐するため犯罪者になろうと決心したのだ。それも何らかのシンボルを兼ね備えた、象徴的な悪人へと。世間から忌み嫌われる事からばい菌をキャラクターに選んだ。そして強盗、略奪等の犯罪行為を始めた。

眞辺にはいつもそばにドキンちゃんと言うあだ名の女性がいた。彼女は、彼の恋人で、結婚こそしていなかったが同棲をしていた。彼女はばいきんまんを常にサポートした。ややこしい工学知識もすぐに覚えたので眞辺にとっては組織的に精神的にかけがいのない存在となった。

「あああ、ドキンちゃん、ドキンちゃん……」

とさめざめと泣きながら化粧を落とした眞辺は彼女にすがりついた。眞辺の犯罪時のしわがれ声も実は作り声で、本当はごく普通の男性の声よりやや低音に響く程度であった。

「あああ、ドキンちゃん……」

「どうしたの？リチャード。」

ドキンちゃんは彼の頬を撫でながら優しく尋ねた。眞辺は答えた。

「ボク、分からなくなっちゃったんだ。」

「何？」

「ボクのやってる事って、世の中への恨みなのかなあ、それとも個人的な恨みなのかなあ？」

「それがどうしたの？」

「もし、個人的な恨みだったら、ボクのやってる事って何だか勝手な気がして……」

「勝手？そんな事ないわよ。今まであなたのやった事、素敵だわ。」

あなたの支持者も、まあ養殖したかびるんとは言え、沢山いるじゃない。」

「そりゃ、そうだけど……」

「いつまでもよくよく悩むのは良くない事よりチャード。ほら、城内のあの子から情報を聞き出す仕事が残ってるじゃない。」

「そう、だね……」

ばいきんまん眞辺リチャードのアジト、通称ばいきん城にメロンパンナの姉、ロールパンナが捕われていた。彼女ら姉妹は不良点があ

り、皮膚が傷だらけであった。それでもメロンパンナはメロンパンとして生きていたがロールパンナに至っては包帯で覆わなければならぬ有様であった。

眞辺は再び化粧をして、ロールパンナの部屋に入った。化粧さえすれば、繊細で軟弱な眞辺は、暴虐なばいきんまんへと人格を変える事ができる。ばいきんまんはだみ声で強く問いつめた。

「アンパンマンが一体何なのか、吐け！」

拒めば電気ショックが流れた。それは多大な、精神的肉体的苦痛を与えるものであった。

そして長時間の拷問の末、ロールパンナはとうとうアンパンマンが飯綱の重宝する人造人形であること、アンパンマンに「ANCO」と言う物質が多量に含まれていること、アンパンマンが二人の子供、藍ちゃんと祐樹くんはその一部を与えたことを妹から聞いたなどを白状した。

その話を聞いて眞辺はにやりとほくそえんだ。「ANCO」か、そうだ、「ANCO」だ！あの技術、あれだけは飯綱オリジナルの技術だ、あれが欲しい、あれが、欲しい！

ばいきんまんは言った。

「ご協力ありがとう。最後に……」

最後に？ロールパンナは不安に陥った。

「最後に……」

ぶしゅう！ロールパンナは催眠ガスを吹き付けられ、彼女はそのまま眠り、意識を失った。

## アンパンマンの旅立ち

空を飛びながらどうして自分は無事に帰されたのだろう、とロールパンナは思った。あの麻酔を吹き付けられた時、その後で何をされたのか、変な手術でもされたのかもしれない、とロールパンナは怯えた。しかし、いち早くジャムおじさん達に伝えなければ。藍ちゃんと祐樹くんが危ない。

森にたどり着いたロールパンナはあたりを探し回った。ジャムおじさんか二人の子供、どちらかを発見せねばならない。だが途中ですれ違ったのは復活したテンドンマンだけであった。彼は相変わらず脳を晒していた。彼の声は森の中に虚しく響いた。

「テンドンドンテンドンドン…テンドンドンテンドンドン…」

途中テンドンマンは蹴つまずいた。

「テンドンドンテンドンヒャッ！」

頭から脳髓がこぼれ落ちてそのままテンドンマンは再び死んだ。その時森からがさがたと音がした。なんだろう、ととっさに振り向くとアンパンマンだった。アンパンマン…彼なら子供たちを守ってもらえる、そういった安堵感と共に徐々にアンパンマンに対する殺意が沸いてきた…

「リチャード。」

ドキンちゃんが真辺に尋ねた。

「ロールパンナだっけ…あの子に何をしたの？」

真辺はビクビクと答えた。

「ボク…アンパンマンに…なんか…できればって思って…かびるんるんにも使った、『洗脳チップ』を埋め込んだんだ…アンパンマン



を見たら排除するような…」

「そう…」

突然沸いた殺意にロールパンナは驚いた。だがアンパンマンを見れば見るほど怒りがうつ積し、激しい憎しみにかられた。無意識の中にアンパンマンの顔が大量に現れ、ロールパンナは意識を失いつつあるのを感じた…

気が付くとロールパンナは再び全身を縛られていた。側にジャムおじさん飯綱がいた。

「どうした、ロールパンナ。アンパンマンを危うく殺しかける所」

「アンパンマン？」

その言葉を聞いた途端再びロールパンナに狂気が現れて暴れだした。「うがああ」と暴れながら白眼で拘束具をほどうとしたが不可だった。

しばらくして彼女は正気に戻り、尋ねた。

「あの…私…どうしたんでしょうか？」

「うむ…」

飯綱はしばらく考えて、言葉を選びながら話した。

「君はおそらく拉致されたばいきんまんのアジトで脳内にチップを埋められた。そしてある人物やそれについて見たり聞いたり、とりあえず意識に現れると殺意が沸くようプログラムされた。」

「…」

あまりの事にロールパンナは息をのんでしばらく黙った。そして尋ねた。

「ジャムおじさん…私治るんですか？」

「私にはどうする事もできない。それはおそらく生体チップだ。だから探すのが難しい上に解除方法が分からない。無理に切除したら死ぬ。君はテンドンマンみたいに単純な初期作ではないから、蘇り

も不可だ。」

「…そのチップの“相手”はきつと、ばいきんまんの嫌がる強い方なのでしょう…」

そうロールパンナが言った時、彼女の目が濁り始めた。“彼”が意識の片鱗にも現れるだけでチップが作動した事にロールパンナは焦燥感を抱きながら言った。

「“彼”や仲間たちにお伝え下さい。菅野藍ちゃんと武田祐樹くんが危険です。」

「そして調べたら二人の子供はすでにかびるんに拉致されていた。」

そう飯綱は会議室で言った。

「そこに落ちていた脅迫状には切り貼りでこう書かれていた。『ばいきんまんより、あんぱんまんをヨこせ』彼のアジトはこの、地図の丸印だ。ロールパンナから聞いた。」

「じゃあ僕が行きます!」

そうアンパンマンは立ち上がって言うと、嫉妬にかられてしょくぱんまんが言った。

「はは〜ん。アンパンマンなんか行ってもあつという間にやられてしまいますよ。それよりも私です。私こそが、この任務にふさわしい…」

「じゃあ、二人で行けばいいのでは…」

そうカレーパンマンが言うとしょくぱんまんはあからさまな敵意を持って反論した。以前からこの二人には確執があった。

「アンパンマンなんかと一緒に行く?そんなの足手まといになって

負けるがオチですよ。」

「そんな事は…」

「はあ？逆らうのですか？お前に力がないくせに。」

突然カレーパンマンはブチ切れてしょくぱんまんに殴りかかった。二人は揉合い争った。そしてカレーパンマンは突然例の反応を起こし、それがしょくぱんまんの右腕にかかった。

「あつい！いたい！いたい！」

としょくぱんまんは飛び上がった。右腕が強酸の胃液でやけどのような状態になった。それを見てカレーパンマンはゲタゲタと狂笑しながら嬉しそうに叫んだ。

「見つけたぞ！オレの得意技見つけたぞ！オレ得意わっ…」

しょくぱんまんはカレーパンマンに一撃を与えカレーパンマンはそのまま昏倒した。

しばしの沈黙の後、アンパンマンは言った。

「しょくぱんまん…君は許されない事をした。なぜテレビでは冷静だった君が…」

「テレビは公共だ。だから見えない一面もある。仕方ないではないか。子供のために君をモデルにしたドラマ『それいけ！アンパンマン』に、『しょくぱんまん』役で出演してるのだから。それで仲間を殴るか？」

「君がそういう事をしてる事をマスコミに知られたら子供たちは失望し評判はがた落ち、視聴率が下がる代わりに犯罪が増えるぞ。」

「ふふんっ、お前に何が分かる！」

しょくぱんまんは飛びかかったが、アンパンマンは彼を一撃で倒した。

そして出撃のシャッターのスイッチを作動した時にメロンパンナが来た。彼女は言った。

「友達として言わせてもらっわ。藍ちゃんと祐樹くんはおとりよ。バイキンマンはあなたが欲しいのよ。『ANCO』を狙っているのよ。多分お姉ちゃんの異常も彼の作戦よ。あなた一刻も早くロールパンナから離れたいんでしょう。彼女のためにも自分のためにも。でもあなたが行ったら彼の思っつぼだわ。」

シャッターがゆっくりと開いた。アンパンマンは外を一瞥して再び向き直った。そして言った。

「友達として…？」

「そうよ。友達として言うわ。私、あなたを失いたくないのよ。」  
「…」

アンパンマンは沈黙した。メロンパンナは切迫した顔でアンパンマンを見つめた。

そしてアンパンマンは後ろを向いた。シャッターの外を見つめていた。まさか、とメロンパンナは愕然とした。アンパンマンは言った。

「君は友達じゃないよ。」

突然の言葉。メロンパンナは思わず叫んだ。

「そんな訳無い！私達は、友達よ。」

「いや…」

アンパンマンは鼻をすすり目を拭ってからこう言った。

「藍と祐樹だけが友達さ…」

そして飛び立った。風に運ばれて涙がメロンパンナに当たった。

## アンパンマンの旅立ち（後書き）

注：ラストのセリフはオープニングテーマの「愛と勇気だけが友達さ」です。

## 旅立つアンパンマンとホラーマン ついに最終決戦なるか！！

アンパンマンはその屈強な顔を歪めて男泣きしながら飛んでいた。彼は一人考えていた。

…どうしてメロンパンナにあんなひどい事を言ってしまったのだろう。彼女も友達なはずなのに。もちろん、囚われている藍ちゃんや祐樹くんも友達だ。かけがえのない友達だからこそあのような事を言ってしまったのかもしれない。

…ところでどうしてばいきんまんは彼らを拉致したのだろう。「ANCO」を食べたのだから彼らから摘出すれば・・・できないのか？

…もしかしたらメロンパンナの言うとおり、オトリなのかもしれない。だが、自分は今もうあのパン工場にいたくない。ロールパンナはおかしくなり、しょくぱんまんは公衆の面前で嫌悪感をあらわし、カレーパンマンはついに血迷って嘔吐物に技の活路を見出し、メロンパンナでさえ自分の気持ちを理解してもらえなかった。だから・・・もう、いいのだ・・・。

一方、ここはバイキン城。リチャードは恐怖におびえていた。

「ドキンちゃん。ボク、こわいよお。アンパンマンがくるんだよお。」

「大丈夫よ、リチャード。すべては復讐のため、『ANCO』のため。」

「わかってるよお。ガキどもの『ANCO』などどうでもいい。ど

うせあれは取れないし。」

「そうよ。」

そう。最初から二人の「ANCO」など彼らには眼中に無かった。前の拷問で聞き出した情報で、もっとも貴重だったのは、あの二人はアンパンマンの数少ない友達だったことなのだ。

「大丈夫よ。アレがあるじゃない。あなたの最高傑作。」

「そうだな。最高傑作。」

バイキン城はかびるんややみるんなどの職員が大量に存在し、ばいきんまん真辺が拉致に出かけている間、なにやら機械をせっせと作っていた。唯一ジャムおじさんから盗まれなかった論文に基づいて、新たな戦闘兵器を作らされていたのだ。

それはアンパンマンと違い、金属製であった。外観の鉄骨が、さながら人間の骨のように見え、瞳孔は赤く、きわめて凶暴な顔つきである。これに皮膚をかぶせればシュワルツネッガーそっくりになると言われた。ターミネーターみたいだと思われるが、少し違う。彼らの名は「ホラーマン」だからだ。

そして地下の地下、もっとも下の階にはおそらくバタコさんが聞いたら震え上がるような恐ろしい秘密が隠されていた。

バイキンマンに“変身”した真辺リチャードが来た。ちなみにリチャードの本当の、キアヌ・リーブスそっくりの姿はなぜかドキンちゃんの前しか現さない。ばいきんまんはそこにいた、最優秀のかびるんるんにたずねた。このかびるんるんはメガネをかけていた。

「冷却は？」

「バツチリです。」

「故障部分は？」

「右腕にありましたが修復しました。」

「不都合な部分は？」

「大丈夫です。」

「武器の調子は？」

「万全です。」

「アンパンマンを倒せるか？」

「さあ・・・彼次第じゃないでしょうかね。」

「そうだな。まあ、ムリだろうが。」

ばいきんまんとエリートかびるんの前には、6 mはあるかと思われる巨大なホラーマンの頭部があった。



決戦！そしてアンパンマンに下された結論とは！

とうとうバイキン城に着いたアンパンマン。黒々としたその地は見たところどこも密閉されていて侵入はできないようだ。もちろん「ANCO」狙いなら、自分の命を狙っているに違いない、とアンパンマンは考えた。

ゴウンゴウンゴウン。

突如轟音と共に、地面の巨大なハッチが開いた。何だろうか。中を見たら暗闇だ。しばらくアンパンマンは見守った。そして…

「ウオオオオオ！」

と言う野太い叫びと共に、巨大な鉄人ホラーマンが飛び上がって、地面に着地した。身長65mはあろうその鉄人は赤い瞳でアンパンマンを見据え、巨大な手で握り潰そうとした。それを巧みにかわすアンパンマンだが、このままではラチが明かぬと一端離れた。

ちょこまか動いで逃げ出したアンパンマンに業を煮やした巨大ホラーマンは、手足を変形させ飛行機に変身し、ジェットでのごごと飛び始めた。なにしろ巨大なので、スピードは遅いようで早く、かくして空中で追い掛けられるアンパンマン。ホラーマンから銃弾がただただと飛んできた。だが飛び道具を持たないアンパンマンに反撃はできない。

ババンヒュッ！

銃弾が頭に命中した。あああと思った次の瞬間アンパンマンは落

ち始めた。

そして地面で横たわるアンパンマン。そこに元に戻ったホラーマンが手をかざして止めを刺そうとしていた…

ずどおおおん！

ホラーマンは地面に手を押し付け、ぐりぐりと擦り潰した。そしてゆっくり地面から手を離れた。

アンパンマンはいなかった。

「メロンジュース！」

突然叫び声が聞こえ、ホラーマンが振り向くとメロンパンナがアンパンマンを抱えながら、網目模様の傷痕から緑の毒液をホラーマンに発射した。命中したホラーマンはたちまちエラーが発生して苦しみ始めた。

「トドロドロドロ」

上空からカレーパンマンが強酸の胃液をホラーマンの頭にかけた。ホラーマンは失明し、暴れ回った。山々に衝突し、悲鳴を上げた。そこにしよくぱんまんが現れ、止めの一発をホラーマンに与えた。

「ぎえええええ！」

ホラーマンは高い高い崖から突き落とされ、激突し、動かなくなつた。

「アンパンマン！アンパンマン！」

メロンパンナが必死にアンパンマンを呼び掛けた。アンパンマンは目をつつすら開けてメロンパンナの姿を認め、言った。

「メ…メロンパンナ…僕は…もう…だめだ…」

「そんな！」

「さつきは…ひどい…事言って…ごめん…ぐほつぐほつ」

咳き込んだ時、アンパンマンの口からアンコが出た。

「お願い、しゃべらないで！いいわよ。分かってたわ。」

「メロンパンナ…」

「もうしゃべらないで！」

だが彼はしゃべり続けた。

「メロンパンナ…おまえが…」

「…！？」

「す…き…ぐほつ」

そのままアンパンマンは事切れた。メロンパンナはメロン色の涙をぼろぼろ流し、大泣きした。

「だって…私も好きだったのに！なんで始めからいわなかったの！ばか！ひどい、ひどいよおお！ずるいよおお！私を置いてかないで！」

うわあああんと泣く声に、ジャムおじさん飯綱は沈痛な面持ちで帽子を脱ぎ、胸に当てた。そしてアンパンマンに近付き、首を外して天に掲げた。その死顔は美しく、暗いこの地で光輝いているように見え、皆大泣きした。

「そんな！」

「ごめん、ごめんよう！」

「アンパンマン！」

「謝る！謝るから！」

そしてジャムおじさんは首を下ろし、首のないアンパンマンに一礼して言った。

「愛する人を守るため、愛する人を救うためにとつたアンパンマン

の手段はなんと高潔な事か。我々も彼を見習い、共に生きて行こう！今我々が生きているのは彼のおかげだったから！」

そしてジャムおじさんはアンパンマンに新しい顔をはめた。アンパンマンは立ち上がって叫んだ。

「元気百倍！アンパンマン！」

かくしてアンパンマンがあっさりと蘇り、皆呆然としていた時、バイキン城のハッチ門が開いた。そこから大量の2mほどのホラーマン兵が現れた。

「千、いや一万ぐらいいるぞ。」

「勝てるのかなあ。」

「勝てるさ。」

「そうだよ。皆が団結すればそこに勝利がある！」

そして、アンパンマン達、そして大量のテンドンマンがホラーマンに向かって突進した。

「テンテンドンドンテンドンドン、テンテンドンドンテンドンドン、  
テンテンドンドン」「うがああ」「ぐさっ、ばしゅう、」「テンテンド  
ンドン」「下呂呂」「がん、ずが、ぶしゅう」「うおおん」「どん、ずが、  
」「テンテンドヒヤ」「テンドヒヤ」「ドヒヤ」「ドヒヤ」「ずが」「な  
ああ」「ドヒヤ」「どす、ばた、」「アンパーンチ」どがらんしゃん、

ずご、ずご、「下呂」しゃわああ、ビジジジ、ジジジ「ロンジ  
ユース、メロンジユース、メロンジュ」ビジジ、どがどが、  
すこん、ばたん、「ぎええええ！」どん、がん「伏せろ！」だだだ  
だだだだだきゅんきゅんだだだだ「ぐわ」「ぬわ」「どえ」  
「ぐお」だだだだだきゅんだだだだ「ンキック！」どがん  
らん、ごすごす、ぐしゃ、ぐさつ、ごうん、「テンテンドロヒヤ  
ッ」ばん、ばん、がす「逃げろ！」ずがあああああああん  
ん……………かん、ぐしゃ、ずこん……がん……ぼん……………どさ  
つ……………ぐそぐそ、ヴィゴーン、ぎゃろん、ぜが、ずが、ずこん「ア  
ンツ、プアーンチ！」ヒュン、ずがががががががががが  
「ドヒヤッ」がががが、どこん。

「よし、骸骨どもは掃討した。内部に侵入だ！」

そしてアンパンマン達はバイキン城に入った。残るホラーマンやか  
びるんるんをやっつけながら彼らは進んだ。エリート含むかびるん  
るん達は逃げ出した。そして彼らは最上階まで迫った。

ドアを開けた。

「そこまでだ！ばいきんまん！」

だがアンパンマンが見たのは驚愕の光景であった。中身がすっかり  
真辺リチャードになってしまったばいきんまんが、ドキンちゃんを  
膝枕に親指をくわえてしくしく泣き、そのドキンちゃんは慰めるよ  
うに、リチャードの顔を撫でていた。ドキンちゃんはしょくぱんま  
んを見て「お、イケメン」とこっそり携帯で写真を撮った。リチャ  
ードの顔は涙で化粧が取れてまだらになっていた。

こんな弱々しい哀れな人間と戦っていたのか…とアンパンマンは思  
った。そして拳を下に下げた。

眞辺リチャードは泣きながらジャムおじさんを睨んだ。そして涙でしわがれた声で叫んだ。

「い…飯綱…貴様の…恨みは…わすれヒックわすれないぞ…貴様が何をしたか、お前ら知ってるか!？」

飯綱は彼が大学時代のあの眞辺である事に気づき、さらに彼への悪行を人造人間にバラすつもりだと察し、叫んだ。

「アンパンマン！彼を殺せ！」

アンパンマンはびっくりして答えた。

「いやしかし、これは…」

「何を言うか！わしの命令じゃぞ！殺せ！殺すんじゃあああ！」

突然現したジャムおじさんの本性に彼は驚いた。あまりに哀れな眞辺を殺したくはないが、飯綱の命令は絶対であった。どうしようか悶々していると飯綱は言った。

「ええい優柔不断め、わしが殺してやる！」

そして銃をかまえた。

どががががが。

突然部屋が崩れて巨大な手が現れた。脱出したかびるんるんが、巨大ホラーマンを修復して手動にしたのだ。エリートかびるんるんがマイクで叫んだ。

「ばいきんまん様！こちらへ！」

ばいきんまんとドキンちゃんはホラーマンの手にすがり、逃げ出した。

「わしらも逃げよう！」

飯綱達も逃げ出した。その際藍ちゃんと祐樹くんを救出した。多分読者のみなさんは彼らの存在なんぞ忘れていただろうと思う。

そして戦車付近に来た時、突然飯綱が銃を構えて叫んだ。

「アンパンマン！貴様を反逆罪で処刑する！」

そしてファシスト飯綱はアンパンマンの胸に向けてバキユンと銃で撃ち殺した。さっきとはエライ扱いの違いにメロンパンナは逆上し、叫んだ。

「何するんです！体殺したらもう終わりじゃないですか！」

「なあメロンパンナや。」

飯綱は言った。

「お前思わなかったか？はたしてアンパンマンに『体』が必要なのか。」

「……？」

「わしは思ったのじゃ。アンパンマンの力は頭の『ANCO』から出る。だから頭だけで十分じゃと。」

「……！？」

「だから用意したのじゃ。」

そう言うアンパンマンの戦車のトランクが開きだし、中から大量のアンパンマンの顔が現れた。彼らは無表情な笑顔でかたかた動いていた。飯綱は命令した。

「あの飛行機ロボットを破壊しろ！」

するとアンパンマンの顔達は「ははは」「ははは」と抑揚なく笑いながら一斉に飛んだ。

「隊長！」

かびるんるんが叫んだ。

「隊長！なにか細かい丸いものが沢山こちらに來ます。」

「なに？」

ばいきんまんは見た。最初は何だか分からなかったが、やがてそれが大量のアンパンマンの首である事に気付いた。

「ぎああああ！！！？？」

とうとうばいきんまんのゲシュタルトは崩壊し、発狂した。彼は訳の分からぬ笑いをしていた。

「ハッヒフツヘホーハッヒフツヘホーハッヒフツヘホー」

「こんなのって無いわ、ひどいわ。」

と再びメロンパンナは号泣した。アンパンマン達はホラーマンに攻撃した。

ずがががぐん。

ゆっくりと炎上しながら墜落するホラーマン。背後で「アンパンマンマーチ」が虚ろに響いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6457m/>

---

ANPANMAN ~ 驚異の真実 ~

2010年10月8日12時46分発行